

## 『その日、教会に…』(使徒の働き 7章 51節-8章 4節) 2023.9.3.

<はじめに> 読む者には心傷む記述が続く箇所です。神がおられるのに、どうしてうまく事を運んでくださらないのか、と苛立ち落ち込むことはないでしょうか。それでもなお、神を信じるとはどういうことなのでしょう。神はそれにどう答えられるのでしょうか。

### I 耳をおおう人々(7:54-58)

#### ①はらわたが煮え返る思い(54-58)

聖書に基づくステパノの論述に、議員たちは真っ向から反論できず、自分たちがいつも聖霊に逆らい(51)、律法を守らなかった(53)と言われて逆上します。ステパノが神の右に立つイエスを見た(56)との言葉を神への冒瀆とし、町の外で彼を石打ちにします。

#### ②なぜ怒ったのか

不意に真実を突き付けられると、人はどんな反応をするでしょう。怒りは強い否認の表れです。律法も預言者は、いつも彼らの立場と考え方・生き方の根拠であり、擁護するものとして見ていました。しかしステパノは、彼らに厳しい非難の言葉を浴びせたのです。

#### ③聖書との向き合い方

彼らの姿は、聖書に親しむ者が自分の欲する言葉だけを求めることに警告を促します(II テモテ 4:2-4)。聖書を読む者に、聖霊は語り掛け、気付かせようと働かれます。たとえ痛く厳しい言葉でも、それをへりくだって聞き従おうとする姿勢があるのでしょうか。

### II 怒りが引き裂く(7:58-8:3)

#### ①ステパノの殺害(7:58-8:1)

怒り猛る中でも彼らは律法に準拠します。神を冒瀆する者は石打ち刑(レビ 24:14-16)で、宿営の外で行われ(レビ 24:23)、証人たちから石を投げつけます(申命記 17:7)。証人たちの上着を預かり、処刑に賛成していた者として、サウロ(のちの使徒パウロ)が登場します。

#### ②ステパノの叫び(7:59-60)

石に打たれながらステパノは主を呼びます。自らの霊を御手に委ね、自らを迫害する者の罪の赦しを求める叫びの後、彼は息を引き取ります。十字架上の主イエスの祈り(ルカ 23:46,34)が思い起こされます。処刑する者たちにも強い衝撃があったに違いありません。

#### ③裂かれる教会(8:1-4)

ステパノ処刑を端に、使徒たち以外はみな、突然エルサレムから諸地方へ追い出されます。この激動の中、悲しみつつステパノを葬った人たちがいました。市内に潜む者たちも次々捕えられ、教会は崩れたかに見えますが、彼らは行く先々でも福音を伝え歩きます。

### III 苦難と神のみこころ

#### ①神のみこころはどこに

ステパノらの登用で福音はさらに広まりましたが、片や迫害の起因ともなりました。教会は波風荒ぶる中、したたかに進んでいます。問題の相次ぐ中、聖徒たちは神のみこころをどこに見出していたのでしょうか。私たちは神のみこころをどのように知ればよいのでしょうか。

#### ②殉教者の血は教会の種(教父テルトゥリアヌス)

ステパノの殺害とそれを起因にする迫害は教会と聖徒たちを苦しみ悩ませました。しかし彼の生き様は主イエスを思い起こさせ、復活の主を信じ、福音に生きる道を証します。散らされた聖徒たちも、彼の生き方に倣い、困難な中にも福音に生きようとしています。

#### ③主の通り道(詩篇 68:24 文語訳)

聖徒たちがユダヤ・サマリヤの諸地方に散らされたことで、福音はエルサレムからユダヤ全体へと広がります(1:8)。迫害者サウロの登場は、後の回心への序章です。禍中では困惑することも、後で分かる神の御計画があるのではないのでしょうか(ヨハネ 13:7)。

<おわりに> 万事自分の思い通りになることは稀です。むしろ困難と逆風に悩まされることの方が多いでしょう。しかし、その中でも主がともにおられ、聖徒たちを導き追い立ててでも、ご自身の御計画を着実に実現されて行きます。主の進み行かれる道に私たちも続きましょ。(H.M.)